

読む・知る・つながる大体大マガジン

OUIHS

OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES

Vol.234 2024.12.23

JOURNAL

〈旬な大体大生〉
陸上関西インカレ
男子 100m 優勝

萩尾 脩人さん

HAGIO SHUTO

〈巻頭特集〉

フレンドリーマッチ

大体大



旬な大体大生

陸上関西インカレ男子 100m 優勝

はぎ お しゅうと
萩尾 脩人 さん

体育学部4年・陸上競技部

大阪・門真なみはや高校出身。2024年5月、関西学生選手権100mで、本学として同種目39年ぶりの優勝。10月の関西学生種目別選手権では2連覇を達成した。

3年の後半から躍動したスプリンター。昨年秋季の関西学生種目別選手権100mで初の優勝を飾った。そこから「関西1位」にこだわり、今季は5月の関西学生選手権100mで10秒43をマークし、本学として同種目39年ぶりの優勝を

達成。7月の西日本学生選手権は10秒40で3位だったが、10月の関西学生種目別選手権は10秒33（追い風参考）で2連覇を達成した。

高校時代は大阪インターハイでも予選落ちで、目立った実績はなかったが、入学後、自己ベストを徐々に更新していくなど着実にステップアップした。

その理由は「大学では、陸上がめっちゃめっちゃ楽しかったから」。練習では基本的なメニューはあるが、それ以外は自分で考えて実行するなど自主性が重んじられている。「やらされるのではなく、自分から取り組むことで、技術や知識を吸収できた」と振り返る。

卒業後も企業に進んで陸上を続け、来年9月の東京世界陸上をめざす。



interview

〈萩尾選手インタビュー〉

―今季を振り返って

関西インカレで優勝するなどスタートが良く、波に乗って行けました。

―なぜ大阪体育大学に進学したのか

小学生の時、テレビでウサイン・ボルト選手（五輪3連覇）を見て、「この人を抜かしたい」と思って陸上を始めました（笑）。高校の陸上部では後輩に教えることが楽しく、教えることにもスポーツにも関わられる体育の教員にあこがれ、大阪体育大学を選びました。

―100mの魅力は

走る側としては一瞬で終わり、とても緊張しますが、そこに楽しさがあります。また、100mは僅差で勝敗が決まり接戦がとて多いので、その「わくわく感」を見ている方に伝えることができる種目だと思っています。

―卒業後の目標は

東京世界陸上（来年9月）に出場したい。そのためには、まず標準記録を切って日本選手権（7月）の出場権をつかみ、そこで好成績を収める必要があります。出場できる可能性は大きくないですが、一つでも多くの大舞台を経験したいと思っています。

第57回 雨山祭

熊取キャンパスで開催 5年ぶりアーティストライブも



盛り上がったステージ企画



雨山祭実行委員会の甲斐彩京実行委員長



飲食の模擬店やフリーマーケットのブースが並んだ



地域の子どもたちが楽しんだ運動会企画

大阪体育大学の学園祭「第57回雨山祭」が、10月26日と27日の2日間、熊取キャンパスで開かれた。

職員駐車場に設けられた野外ステージでは、のど自慢、早食い選手権、クイズ大会、ビンゴ大会などの恒例の企画をはじめ、20mシャトルランの伴奏音にあわせ、シュークリームをどれだけ長く食べ続けられるかを競う「シュークリームシャトルラン」といった新しい企画、ダンス部の発表などが行われた。このほか、アームレスリング、体育館でのバレーボール大会といった体育大学らしい企画も繰り広げられた。

初日の26日には、小学生を対象にした運動会企画が開かれ、参加した地域の子供たちがサポート役の大学生とともに、玉入れや鬼ごっこ、ポートボールなどのプログラムを楽しんだ。

また、27日には浪商高校体育館を会場に、5年ぶりのアーティストライブが開かれ、4人組の邦楽ロックバンド「Mr.ふおるて」がパフォーマンスを行い、雨山祭のラストを盛り上げた。

雨山祭の会場には、飲食の模擬店やフリーマーケットのブース、キッチンカーなどが並び、和やかな雰囲気の中で、学生をはじめ、地域住民ら、会場を訪

れた人たちがそれぞれ休日の一日を楽しんでいた。

雨山祭の企画・運営を担う実行委員会は1年生が主体で、2年生の実行委員長らがまとめた。雨山祭実行委員会の甲斐彩京実行委員長（体育2年、花園高校出身）は「色々な人の助けがあった。5年ぶりにアーティストライブも復活し、コロナ禍前の賑わいを取り戻せたと思う。今後多くの人に来場してほしい」とエールを送っていた。

contents

01 旬な大体大生

02 第57回雨山祭

03 巻頭特集

Bチーム交流戦「フレンドリーマッチ」

05 NEWS

- 1 泉佐野署と防犯連携協定
- 2 公立学校教員採用試験52名現役合格
- 3 シンガポール研修を実施

- 4 西安体育学院70周年式典に参列
- 5 ハンドボール部女子インカレ11連覇
- 6 男子も堂々のインカレ準優勝
- 7 全学生対象に交通・薬物講習会
- 8 石川教授の産学連携論文が国際雑誌に掲載

09 大体大PEOPLE

守谷 遼平:読売新聞東京本社写真部記者

11 NEWS

- 1 レスリングメダリストが本学で指導
- 2 パリパラリンピック・中澤選手団副団長が報告
- 3 宇津木選手がロスパラリンピックめざし大学院へ
- 4 北谷選手がデフリンピック2連覇めざす
- 5 消防防災訓練を実施
- 6 大学院・端岡さんに日本生涯スポーツ学会最優秀賞

13 コラム 窓

14 コラム ポーシャー

フレンドリーマッチ

大体大×武庫川女大
女子バスケットボール
Bチーム交流戦
引退の4年生「両親の手紙」に号泣

バスケットボール部女子交流戦「フレンドリーマッチ 2024 大阪体育大学×武庫川女子大学」が11月25日、大阪体育大学第6体育館で開催された。フレンドリーマッチは、普段公式戦のベンチに入れずに出場できないBチームの出場の場。インカレに出場できないBチームの4年生にとっては、引退試合となる。運営を担う学生スタッフの演出で、試合後に両大学の4年生全員に両親らが手紙を渡すサプライズがあり、4年生が号泣するなど感動的なイベントとなった。



試合は午後6時半、ティップオフ。スピーディーな攻防が続く。バスケットボール部男子のほか、ハンドボール部女子、硬式野球部女子、テニス部女子、浪商高校バスケットボール部の選手もチームで観戦し、声援を送った。ハーフタイムには、両チームがモップリレーで対決。子どもたちと監督、選手がモップをバトン代わりにリレーして、会場を沸かせた。大体大ダブルダッチ部のパフォーマー

フレンドリーマッチは2017年、以前から親交のあった両大学間で始まり、毎年、交互に両大学で開催されている。20年はコロナ禍のため中止されたが、その後再開し、大体大では3回目の開催となった。大体大体育学部スポーツマネジментコース専攻の学生十数人が中心となり、企画・運営を担うことも大きな特徴だ。また、株式会社エイブルをはじめ、Wリーグなどのチームや企業が協賛。大学スポーツ協会（UNIVAS）、熊取町などが後援した。

試合当日。会場は、両大学・チームの関係者や卒業生、家族の方、学生、地域の方など前回を上回る500人以上が詰めかけた。試合は午後6時半、ティップオフ。スピーディーな攻防が続く。バスケットボール部男子のほか、ハンドボール部女子、硬式野球部女子、テニス部女子、浪商高校バスケットボール部の選手もチームで観戦し、声援を送った。ハーフタイムには、両チームがモップリレーで対決。子どもたちと監督、選手がモップをバトン代わりにリレーして、会場を沸かせた。大体大ダブルダッチ部のパフォーマー

ンスも披露された。試合は、終盤、武庫川女子大学が激しく追い上げて同点に。最後は57-55で大体大が勝利した。クロージングセレモニーでは、両チームの4年生の父母らがコートに入り、娘に手紙が入った封筒を手渡すサプライズがあった。学生スタッフが選手には秘密で父母らと準備してきた演出で、4年生は驚き、目を真っ赤にしていた。続いて武庫川女子大学の坂井和明監督が「リーグ戦をはるかに超える舞台でした。インカレの決勝のような選手同士で声が届かない中でゲームを経験でき、感動しています。大体大の村上なおみ監督は、「ここにいる4年生は、ユニホームを着るのは最後になります。日ごろから日本一をめざして一生懸命練習に取り組んでくれました。応援してくれた各クラブの学生もありがとう。全体で応援して盛り上がるのが、他大学にはない大体大のいいところです」とあいさつした。両チームの選手はその後、Aチームも一緒になって写真を撮り、健闘をたたえ合った。



村上なおみ監督



両親らからサプライズで手紙を渡され、感極まる4年生



Aチーム、父母らもいっしょに両チームで記念撮影



フレンドリーマッチインタビュー

学生スタッフ・田中智也さん(体育学部4年)

「イベントを運営した感想は。」

自分たちが想像していたよりも音響や照明でサポートしてもらい、より良いイベントができたと思います。スポットライトは予算の関係で難しかったのですが、リハーサルの時に4基もあり、びっくり。インターンでお世話になったイベント運営会社に感謝しています。

「両親の手紙」は感動的な場面だった。

引退する4年生に「今まで頑張ってきた中で最高の舞台を用意するのがぼくたちの役目」だと思い、両親から事前に手紙を送ってもらうなど、選手には秘密で準備を進めました。

「準備で大変だったことは。」

企画の立案です。従来はハーフタイムショーでパフォーマンスをしていましたが、大学全体で観客も参加したイベントを組み込みたいということで、モップリレーを入れました。

「フレンドリーマッチの意義とは。」

4年生、Bチームにフォーカスしているところです。また、スポーツマネジメント専攻の学生が企画・運営を決め、学生主体である点にも意義があります。

「大学での学びは運営で役に立ったか。」

企画を考える中でターゲットイングや、集客でどの層を重視するのかというセグメントなど藤本(淳也)先生の授業で学んだ知識は役に立ちました。また、運営で大切なのは人のマネジメント。伊原(久美子)先生の授業でチームビルディングを学んでいた



泉佐野署と連携協定

学生ボランティアが防犯活動

大阪体育大学と大阪府泉佐野警察署が10月24日、自主トレ中のランニングパトロール(ランパト)などで安全・安心なまちづくりをめざす包括連携協定を締結した。クラブ生ら学生18名が警察ボランティアとして委嘱された。

大阪府警が人的交流を目的に大学と連携協定を結ぶのは初めて。協定は、今年4月、スポーツ科学部の学生が電車内での盗撮事件で容疑者逮捕に協力し、泉佐野署から感謝状を贈られたことがきっかけだ。

自主トレやジョギングを兼ねて街中をパトロールするランパト、SNS上の有害情報や犯罪情報を見つけて警察に情報提供する「サイバーパトロール」、防犯・交通マナーなど各種キャンペーン活動への参加が想定されている。また、協定を受けて、警察関連施設の見学会や若手警察職員との意見交換会なども今後想定され、警察官志望の学生にとって、活動を通じて警察官の仕事に身近に接する機会が広がる。

締結式には泉佐野警察署・酒

本和郎署長、大阪体育大学・原田宗彦学長が出席。酒本署長、原田学長が互いに協定書に調印した。

締結式には、いずれも体育学部3年の石川晃輔さん(硬式野球部、大谷高校出身)、正井信之介さん(同、須磨友が丘高校出身)、村上天基さん(同、総社南高校出身)、武田紗季さん(無所属、桐蔭高校出身)、星隈一輝さん(アメリカンフットボール部、西宮今津高校出身)、松本優斗さん(ライフセービング部、佐野高校出身)、山中葉々花さん(ソフトテニス部、和歌山信愛高校出身)、藤田咲貴さん(トリアスロン部、神戸野田高校出身)がランパトTシャツを着て参加し、酒本署長から1人1人に委嘱状が手渡された。

学生警察ボランティアは11月14日、「初出勤」。本学のキャンパスでお昼休み中の学生に、泉佐野警察署の署員らとともにチラシを配り、「間バイト」や自転車のながらスマホ、酒気帯び運転などへの注意などを呼びかけた。



キャンパスでチラシを配る警察ボランティア



公立学校教員採用試験

52名が現役合格 / 「合格率」は前年度比プラス

令和7年度(来春)採用の公立学校教員採用試験の合格者は12月7日現在で延べ52名となった。校種別では、小学校38名、小中連携2名、中学校7名、中高1名、高等学校1名、特別支援学校3名だった。

体育学部の合格者は延べ7名(実人数6名)、教育学部の合格者は延べ45名(実人数35名)。合格者人数は前年度比で減少したが、受験者数に対する合格率はアップした。

4年生の合格以外に、川崎市の3年生を対象とした特別選考で1名が最終合格となった。この学生は令和8年度教員採用試験合格者第1号となった。

昨年度から実施されている大学3年生等を対象とした前倒し選考を実施する自治体や校種が増えたこともあり、3年生51名がチャレンジし、21名が「選考通過者」となった。選考通過者は次年度の第1次選考の筆答試験の一部が免除となり、4年次での受験負担が軽減される。

また、60名を超える卒業生から教員採用試験合格の報告が届いている。

文部科学省は来年度の教員採用試験を今年度よりさらに早い5月11日を目安に始めるよう各教育委員会に要請しており、今後も各自治体の実施情報を注視していく必要がある。

シンガポール研修を実施

協定締結校と学生が相互訪問



研修報告会に参加した学生の皆さんと教員

シンガポールと日本の違い、NYPやプログラムの詳細などを説明。乗原その子さん（体育学部3年・和歌山北高校出身）は「シンガポールの学生とは、スポーツをすることや言葉は通じなくても心は通じ、スポーツの素晴らしさを感じた。研修の1週間は、なぜ自分が体大でスポーツを学んでいるのかを改めて感じる日々となった」などと報告した。

また、10月にはNYPの教員2名と学生26名が本学を訪問するなど、活発な交流が展開されている。



サッカーで交流

シンガポール研修が9月1～8日に行われ、スポーツ科学・体育、教育の各学部の1～3年生15名が参加した。プログラムは、昨年、本学と交流協定を結んだ南洋理工学院（NYP）でのスポーツ・文化交流がメインで、本学卒業生で原田宗彦学長のゼミで学んだ難波修二郎さんがCEO（最高経営責任者）を務めるプロサッカーチーム「アルビレックス新潟シンガポール」の訪問、国立スタジアム見学なども組み込まれた。

研修の報告会が10月23日に開かれ、参加学生が交代で、プログラムの概要やシンガポールと日本の違い、NYPやプログラムの詳細などを説明。乗原その子さん（体育学部3年・和歌山北高校出身）は「シンガポールの学生とは、スポーツをすることや言葉は通じなくても心は通じ、スポーツの素晴らしさを感じた。研修の1週間は、なぜ自分が体大でスポーツを学んでいるのかを改めて感じる日々となった」などと報告した。



式典で祝辞を述べる野田賢治理事長

野田賢治・浪商学園理事長らが10月9～12日、学術交流協定を結ぶ西安体育学院（中国・西安市）を訪問し、70周年記念式典に参加した。

本学と西安体育学院は1986年に協定を締結。今年6月、同学院トップの劉子実党委書記らが本学を訪れ、学術交流協定更新の調印式に臨んだほか、両学合同の研究発表会など様々な交流事業を実施した。

記念式典では、野田理事長が祝辞を述べたほか、前島悦子国際交流センター長が本学の紹介を行った。スポーツ科学部の近藤衣美講師は体力づくりと健康増進をテーマにした、同学院主催の第2回国一アセアン国際会議に出席し、栄養学に関する研究成果を紹介した。



国際会議で発表した近藤衣美講師（右から2人目）

一方、西安体育学院の教員2名と大学院生2名も研究交流の目的で本学に滞在。本学からも体育学部3年生1名が今年8月下旬から西安体育学院に1年間留学するなど活発に交流している。

西安体育学院70周年式典 野田理事長らが参列

ハンドボール インカレ

女子 驚異の11連覇

主将置かず全員が主将



ハンドボールの高松宮記念杯男子第67回・女子第60回全日本学生選手権大会の決勝が11月10日、広島県立総合体育館で行われ、本学女子は筑波大学を36―30（前半17―14）で降し、最長連覇記録をさらに更新する11連覇（12回目優勝）を達成した。

優秀選手賞に石川空選手（体育学部4年、大分鶴崎高校出身）、濱口まお選手（体育学部4年、四天王寺高校出身）、福井すみれ選手（体育学部4年、名古屋経済大学市邨高校出身）、比嘉楓選手（体育学部3年、那覇西高校出身）が選ばれた。

女子は、1回戦で札幌国際大学、2回戦で福岡大学、準々決勝で日本体育大学に勝ち、準決勝も東海大学に35―20で快勝。決勝は、骨折した右手中指を固定して出場した石川選手が9得点を挙げた。

チームは11月18日、野田賢治理事長、原田宗彦学長に優勝を報告。石川選手は「今年は主将を置かず、部員一人ひとりが主将という意識を持って取り組んでいたことが11連覇につながった」、比嘉選手は「プレッシャーで初戦は体が動かなかったが、4年生がいっぱいいてくれたおかげで決勝戦は楽しむことができた」などと語っていた。



石川空選手

男子 堂々の準優勝

走り切るハンド貫く

ハンドボールの全日本インカレで、本学男子は小柄な選手が走り切るスピードいなるハンドボールで勝ち上がり決勝に進出。最後は中央大学に35―37（前半15―18）で敗れたが、準優勝を果たした。本学男子は1回戦で北海道大学、2回戦は日本大学に勝利。準々決勝は日本体育大学を44―43、準決勝は関西学院大学を38―36といずれも接戦で降した。決勝は登録メンバー中190センチを3人、180センチを14人擁する大型チームの中央大学に対し、173センチの荒瀬廉選手（体育学部4年、神戸国際高校出身）が10点、168センチの下川陽向選手（体育学部3年、大阪体育大学浪商高校）が7点を挙げたが及ばず、5大会ぶり11回目の優勝は果たせなかった。優秀選手には、荒瀬選手、田代優樹選手（体育学部4年、大阪体育大学浪商高校出身）が、特別賞には橘光太郎選手（体育学部2年、同）が選ばれた。

主将の荒瀬選手は「悔しいのひとことだが、いつでも走るハンドボールを徹底してきて、『小さい者でもできる』という点は見せられた」と話している。



荒瀬廉選手



田代優樹選手



橘光太郎選手

交通・薬物講習会

全学生対象に実施

全学生を対象にした「交通ルール・薬物乱用防止講習会」が10～11月に実施された。

10月7日の第1回では、スポーツ教育学科の4年生約360人が受講。泉佐野警察署生活安全課防犯係の大人（おおひと）学警部補が講師を務め、交通ルールの順守、薬物乱用の防止について話した。



交通ルールでは、自転車も車両であり、歩行者との接触など事故があったら必ず警察署に届け出るように呼びかけた。薬物関連では、風邪薬、頭痛薬などの市販薬も薬物であり、処方を守らない大量服用などは薬物乱用にあたりと指摘した。

また、大人警部補は、特殊詐欺での「受け子」を募る闇バイトについても、「いったん手を染めると、相手に自分の個人情報握られ、家族や大学にばらすなどと脅されて抜けられなくなる」と注意を呼びかけていた。

石川教授の産学連携論文

国際雑誌「Sensors」に掲載

スポーツ科学部・石川昌紀教授と医療機器製造・販売「株式会社コラントツテ」（本社・大阪市中央区）の産学連携の共同研究論文が10月23日、国際雑誌「Sensors」に掲載された。論文名は「磁気衣類は、30km走った男性長距離ランナーの副交感神経優位を促進し、睡眠の質を改善する」。磁気がスポーツ選手の疲労回復に影響することが明らかにされたのは初となる。

研究は、高強度の長距離走（30km走）後に磁気ウェアを着用することが、男性長距離ランナーの自律神経系と睡眠の質に与える影響を調査した。検証は、男子長距離ランナー15名を対象に、磁気ウェアと非磁気対象ウェアをランダムに着せもらい、心拍と睡眠への影響を30km走の前後の夜に測定した。磁気ウェアは180ミリテスラの永久磁石を同社独自のN極S極交互に配列し、シャツ背面に

10個、パンツ腰部に6個の磁石を配置した。

検証の結果として、磁気ウェアを着用した条件で、深睡眠時間が有意に増加、浅睡眠時間は有意に減少し、REM睡眠は磁気ウェアの着用後で有意に増加した。また、磁気ウェアを着用した条件では、すべての指標が副交感神経活動の優位性を示した。

このため、磁気ウェアの着用は高強度ランニング後の男性長距離ランナーにおいて、1「副交感神経の優位性を促進し」、2「睡眠の質を改善（特に深睡眠時間の増加）」し、3「主観的な回復感を向上させる」ことが結論づけられた。

検証の実践的意義として、磁気ウェアは激しいトレーニング後のアスリートの回復を促進する実用的な方法となる可能性が示唆された。



平昌・東京・パリ五輪3大会を取材 最高、どん底、人生の岐路を写す



守谷 遼平 (もりや・りょうへい)
1989年4月27日生まれ、35歳。大阪体育大学体育学部スポーツ教育学科卒。2012年4月、読売新聞東京本社に入社。編集局写真部所属。2018年冬季平昌五輪、2021年夏季東京五輪、2024年夏季パリ五輪などを取材。



母校で五輪での取材経験について話す

読売新聞東京本社編集局写真部記者

守谷 遼平 さん

メディアの現場に進んだ大体大生は少なくない。読売新聞東京本社写真部記者の守谷遼平さんは、中学2年の時、画像編集ソフトの授業をきっかけに写真が趣味になり、大学では「OUHSジャーナル編集室」に所属。大学スポーツ新聞「OUHSスポーツ」などの取材で各クラブの試合を追いかけた。あこがれだった新聞社に進むと、新聞社内でも希望者が多く競争が激しいオリンピック取材を3回も経験。昨年、ドローンの国家資格を取得するなど、最先端の機材・技術を駆使し、斬新な取材、紙面展開をめざしている。

大阪体育大学に進んだ理由は。

観音寺第一高校では陸上の走り高跳びでインターハイ、国体に出場し、大学でも陸上を続けたいという思いがありました。両親が教員で、体育教員の免許を取れることも魅力でした。

陸上競技部では。

レベルが高くて、学内選考で関西インカレに出場できる3枠に入ることができず、4年間でインカレは出られなかった。「じゃあ、みんながインカレで競技している姿を好きな写真で撮ろう」と。1年のころから選手の撮影を始めました。

写真を始めたのは。

中学2年の美術の授業で、「画像編集ソフトの「Photoshop」を使って画像を加工するのがとても楽しかった。自分でインターネットからいろいろな画像をダウンロードして加工していましたが、「自分で撮影した写真ならもっと面白いかも」と、コンパクトデジタルカメラを買ったのが最初です。

2年生から「OUHSジャーナル編集室」に所属した。

OUHSジャーナル編集長だった相馬卓司先生（元客員教授、元毎日新聞社編集委員）を紹介され、お会いすると、「じゃあ、週末一緒に行くか」と競泳の大会に付いて行ったのが始まり。週末に、サッカー、バスケットボール、剣道などほとんどの種目を撮影しました。当時は取材に行くたび、中央棟の掲示板にA4・1枚の速報を貼り出しました。何十枚も貼ると壮観で、学生みんなが見てくれてうれしかった。

就職活動は。

ある新聞社のインターンシップで3週間、写真部に付いて、ヘリコプターからの空撮や甲子園大会の決勝などいろいろな現場に行き、「なんて面白い仕事なんだろう」と感激して新聞社の写真記者をめざしました。3年生の7月に就職活動を始め、筆記試験対策を重視して1日10時間勉強し、何とか内定をもらえました。



パリ五輪でウェルフェアオフィサーとして日本選手団に帯同していた恩師の土屋裕睦教授と再会



小平奈緒選手と李相花選手の抱擁（右端）

今振り返って一番思い出深い取材は。

2018年の冬季平昌（ピョンチャン）オリンピック。卒業した時からの夢だった五輪取材ができませんでした。冬季五輪は夏ほど選手が多くないので選手との距離が近く、選手のエピソードや人となりをしっかり理解したうえで撮影できます。特にスピードスケート500m決勝での、金の小平奈緒選手と銀の李相花選手（韓国）の抱擁シーンは五輪精神そのものを表した1枚です。

——詳しく教えてください。

先に滑った小平が五輪新記録をマークした後、地元・韓国で五輪3連覇を

狙った李が小平を抜けずに銀に終わりました。日の丸を掲げてウイニングランをする小平を撮影していたら、肩を落として滑る李が第4コーナーを回って後ろから近づいてきました。小平は振り返って李を迎え入れ、抱擁して互いの健闘をたたえ合いました。2人は実は仲が良く、李は泣き崩れている。予感がありました。2人の関係を知らなかったら、抱擁に気づかなかったかも知れません。当時の日韓関係は最悪でしたが、この1枚は、五輪精神は国籍、政治などとは無関係であることを示しています。歴史的な瞬間だと思いつつながら、2人の抱擁を撮影しました。

——その他に思い入れの深い取材は。

東京五輪はスケートボード、サーフィンなど新たに採用されたアーバンスポーツを担当し、初心者状態で競技関係者から学びながら撮影しました。自分の撮影法がその競技を撮る際の会社の前例になっていく楽しさがありました。パリ五輪では、特殊な360度カメラを使って3か月近くかけてフランス全土で聖火リレーを紹介する企画を1人で立ち上げました。最新の機材や技術を活かすことにも興味があり、昨年はドローンの国家資格を取得しました。

——写真記者の仕事の魅力とは。

いろいろな場所に行き、いろいろな人の最高のシーン、またはどん底の場面もありますが、様々な人たちの人生



守谷さんが撮影したサーフィン

の岐路を疑似体験できることです。金メダリストがうれしくて興奮している場面のすぐ近くにいられる。逆に、能登半島地震で肉親を亡くした遺族の隣にいれば撮れない。記者よりも最前線に立つのが写真記者です。

——学生へアドバイスを。

大体大生は、世界大会、全国大会に出場するなど様々な経験値がある学生が多く、これらの経験は社会に出たら武器になります。また、どんなに写真がうまくても現場にたどりつかなかつたら意味はなく、社会では体力も必要です。ぜひ、高い目標に挑戦してほしいと思います。

レスリングパリ五輪金銀メダリストが 本学で指導

レスリングのパリ五輪メダリストが相次いで本学を訪れ、部員や子どもたちを指導した。

10月15日は男子フリースタイル74kg級銀メダリストの高谷大地選手（自衛隊）が、中学・高校・大学の部員約40人を指導した。

高谷選手はスポーツ科学部でスポーツ栄養学を担当する近藤衣美講師（レスリング部長）が国立スポーツ科学センター契約研究員のころから、栄養指導を受けている。練習後のあいさつでは「皆さんは、世界を知る栄養のスペシャリスト（近藤講師）が身近でサポートしてくれる恵まれた環境にあります、自分で考えないと身につきません。何でもまず自分で考えることが大切です」と語った。

11月16日は、フリースタイル58kg級輪金メダリストの樋口黎（れい）選手（ミキハウス）が第6体育館多目的ホールで、大阪府の小学生中学生45名と高校生合わせて75名を指導。レスリング部員がサポートにあたった。子どもたちは具体的な技術指導のほか、樋口選手とのスパarringにも挑戦。樋口選手は「繰り返し練習することが大切」とエールを送った。



パリパラリンピック選手団副団長

大学院・中澤さんが活動報告

パリパラリンピックで日本選手団の副団長を務めた大阪体育大学大学院博士前期課程2年の中澤吉裕さん（54）が10月28日、本学を訪れ、野田賢治理事長、原田宗彦学長にパリ大会での活動などについて、パリオリンピックにウエルフェアオフィサーとして帯同した土屋裕陸教授とともに報告した。

中澤さんは日本パラリンピック委員会強化本部長兼ハイパフォーマンススマネージャー。2016年リオデジャネイロ大会から21年東京大会まで車いすテニス日本代表監督を務め、土屋教授から代表チームの心理面でサポートを受けたことが縁で2022年4月、大学院に入学。長期履修制度とオンライン講義を利用し、土屋研究室に所属している。

中澤さんは野田理事長、原田学長に、各競技団体ごとの強化計画を統括するハイパフォーマンススマネージャーとして、2028年ロサンゼルス大会に向けて活動していきたい意向や、大学院での学びなどについて報告した。

中澤さんは「土屋先生にサポートしていただいた縁で大阪体育大学の大学院に進んだが、オンライン講義がなかったら、大学院を選ぶ選択の幅はとて狭まっていたと思う。現在、チームビルディングを学んでいるが、組織や競技団体の体はどうしたらうまく動いていくか、人がどう関わりと組織はどう動いていくのかなどを心理学を通じて学ぶことができ、今の自分の仕事にすごく役立っていると感じている」と話している。



パリ五輪でウエルフェアオフィサーを務めた指導教官の土谷裕陸教授と



中澤吉裕さん（中央）

宇津木がパリ入賞を報告

ロスパラリンピックめざし大学院へ

パリパラリンピック競泳女子1000m平泳ぎ（SB8）で5位入賞した宇津木美都選手（教育学部4年）が10月31日、原田宗彦学長にパリでの競技結果や選手村での生活などを報告した。

宇津木選手は、東京大会がコロナ禍で1年延期されたため大学生として2大会を経験した。パリ大会について、「とても楽しめた。（無観客で）初出場した東京大会と違うのは観客が入っていたことで、競泳の会場は毎日満席で観客でいっぱい。あそこまでの観客を見たのは初めて。地鳴りのような声援があり、声援の音量といい音楽の演出といい何もかもすごくライブ会場にいる

ような雰囲気だった。ただ、レースは思ったような結果が得られず、悔しさが残った」と振り返る。

卒業後は大学院に進学し、2028年ロサンゼルス大会でメダル獲得を狙うとともに、将来の夢の教員をめざして教育学の学びを深める。「8年後のブリスベン大会を29歳で迎えるので、そこを最後にし、あと2大会出場したい。長期の目標はロス大会だが、一日一日しっかりと練習を積み重ね、気をついたらロス大会にたどりついていたというイメージで4年間やっていきたい」と話している。



東京デフリンピック

北谷が2連覇めざす

教育学部4年の北谷宏人選手（大阪・大塚高校出身）が来年11月の東京デフリンピックで陸上男子棒高跳びの2連覇をめざしている。

北谷選手は前回の2022年ブラジル大会で、4m20をマークし金メダル。「東京大会をきっかけにデフリンピックの知名度がもっと上がるように、しっかり勝ち切って2連覇を果たしたい」と意気込んでいる。

デフリンピックは、4年に1度開かれる聴覚障害者の国際競技大会。東京大会は日本初開催となり、70〜80か国、約6000人が参加予定。デフスポーツはパラリンピックに含まれず、デフアスリートにとって最

高峰の夢舞台となる。

北谷選手は大塚高校で棒高跳びを始めた。今年7月、世界デフ陸上競技選手権大会（台湾）で4m50をマークし銀メダルを獲得した。卒業後は東京都内の会社に就職して競技を続ける予定。「デフ陸上は健常者の大会と似ているように思われがちだが、ランプでスタートし、拍手も健常者の試合のように手をたたくのではなく、両手のひらをゆらゆらと振るなど、観客の方は視覚的に楽しめる。他の大会では感じられない面白さがあると思う」とデフリンピックの魅力をアピールしている。



消防・防災訓練を 実施

逃げ遅れた学生を梯子車で救出



学校法人浪商学園と大阪体育大学の消防・防災訓練が11月9日、熊取キャンパスで行われ、教職員や学生ら約50人が参加した。訓練は、巨大地震が発生するとともに、地震に伴う電源供給の不安定さや設備の損傷で中央棟3階のサーバー室のサーバーが過熱し、火災が発生したとの想定で展開された。

訓練では、出火を見つけた自衛消防隊の初期消火班が非常ベルを押し、防火シャッターを閉めるとともに、消火器でサーバー室の廊下側の火災を鎮めた。避難誘導班は、各階で非常口や避難経路を示して、迅速な避難を促すとともに、逃げ遅れた学生ら

がいなか、フロア内を確認。この中で、逃げ遅れた学生2人を発見し、煙の届かない6階会議室に移動させるとともに外に合図を送り、救助を待った。

続いて、泉州南消防組合の消防訓練が行われ、高度救助工作車や30台梯子車、タンク車、ポンプ車などが集結。出動部隊は、逃げ遅れた学生らを梯子車で救助し、サーバー室や図書館の消火活動を行った。

訓練には、消防志望の学生も参加し、「想像以上に隊員らが連携して活動にあたっていていることを実感した。より消防をめざしたい気持ちが高まった」などと話していた。

端岡さんに最優秀賞

日本生涯スポーツ学会 ポスター発表大学院生部門



「第26回日本生涯スポーツ学会」が10月、流通科学大学で開かれ、ポスター発表の大学院生部門で大学院博士前期課程2年の端岡里紗さんが最高位となる最優秀賞を受賞した。

端岡さんは小菅萌研究室の所属で、研究発表の題目は「スポーツ場面における自信について―ジェンダーによる違いの検討―」。競技スポーツの経験がある大学生を対象に女性アスリートと男性アスリートの自信の情報源と自信の違いについて研究した。

また、9月に広島大学で開かれた「日本スポーツ心理学第51回大会」では、大学院博士前期課程2年の藤原由規さんと同課程2年の山口菜さんがポスター発表部門で、優秀発表賞を受賞した。2人は土屋裕陸研究室の所属。藤原さんの研究発表の題目は「大学生アスリートにおける心理的安全性と自己調整学習の関連―基本的心理欲求に着目して―」。山口さんの研究発表の題目は「大学生アスリートにおけるNegative Capabilityとバーンアウト傾向の関係」。



◆◆感動的な場面でした。バスケットボール部女子のBチーム交流戦「フレンドリーマッチ」での出来事。試合が終わり、本学と武庫川女子大学の選手が並ぶと、コートサイドの席から父母らが4年生の娘の前に歩み出て、手紙を渡しました。この試合を最後に卒業する両チームの4年生は号泣。公式戦に出場できなくても、全力で頑張った部活動のラストに、うれしいサプライズが待っていました。

◆◆フレンドリーマッチは、音響、映像、DJの軽妙なトークなど華やかな演出がいっぱい。スポーツマネジメント専攻の学生が企画・運営しているのが大きな特徴で、前回は大きく上回る500人以上の観客が来場しました。しかも有料。お金を払ったお客様には座席への誘導、問い合わせへの対応など、よりきちんとした対応が必要ですが、学生スタッフは力を合わせてイベントを運営しました。

◆◆試合では、ハンドボール部女子など多くの部の学生が応援に来て、第6体育館多目的ホールの上部スタンドを埋めて声援を送りました。「ありがたい。全体で盛り上がるのが体大の、他大学にはないいいところですね」。バスケットボール部女子の村上なおみ監督が試合後、各部の学生に手を振りました。体大の魅力は随所に感じたイベントでした。

【大坪康巳】

Going Nowhereの魔法

— 静けさをさがす冒険者 —



コラム **ボーシヤー**

名誉教授 和田隆夫

「Going Nowhere（どこへも行かない）」と言えば、何もしないように思える。しかし、それこそが新しいはじまりを生む鍵である。これまで「書を捨てて街に出よう」と信じてきた。しかし、ほんの少しどこかで「佇む」だけで、自分も世界も一変することがある。そんな魔法の話をした。

以前、「簡素な生活」と題して、都会と田舎の二拠点生活について記したことがある。それは妻の定年退職を機に終りを迎え、私自身のライフスタイルや価値観に変化をもたらした。私の関心は「移動する」ことから「居る」ことへと移り変わったのである。ちょうどコロナ禍と重なり、自宅で写経や金継ぎを試みたり、ケーキを焼いたり、さまざまなことに挑戦した。NiziUのオーディション番組や『鬼滅の刃』に夢中になり、放送大学まで視聴するようになった。

ある日、「家にいてなぜこんなに忙しいのか」と思わず考えこんでしまった。そのきっかけがピコ・アイヤーの『平静の技法』だった。引用されていたレナード・コーエンの言葉が胸に響いた。

「どこへも行かないこと（Going Nowhere）——（中略）——こそが、ほかのあらゆる場所の意味を実感させてくれる大いなる冒険なのだ。」（括弧は筆者）

この本にレナード・コーエンの名前を見つけて心躍るものがあった。

私は、1970年代後半の大学院生時代によくレナード・コーエンを聴いていた。「スザンヌ」や「さよならマリアンヌ」「さよならは言わないで」が好きだった。彼の楽曲は、日常の静かな生活、つまり当たりまえの生活の中に深い精神性を見だし、その静けさの中で感情の振幅を見つけている。そのため、落ちついた奥行きを感じさせる。そして何より、人間の孤独をネガティブには捉えず、自己と向き合う（内省の）機会としている。若い私は、その点を意識することなく、磁石に吸い寄せられる砂鉄のように彼の音楽に惹かれた。

彼の低い声と、シンプルなアレンジが心にしみこんだ。いま聴いてもその感覚は変わらない。それになんといっても存在自体が風貌もファッションもかっこよかった。ポプ・ディランが尊敬するはずだ。

さてアイヤーによれば、「どこへも行かない（Going Nowhere）」とは、ただ家にいるだけのことでなく、場所はどこでもよく、「自分の内面に目を向け、静かな時間を過ごす」ことを指している。禅やヨガほど大げさなものではなく、30分ほど何も考えず椅子に座ったり、あるいはランニングをしたり、とにかく日常の中で静けさを見つけることだ。つまり精神的に「佇む」のである。

近・現代（モダン）は「移動」を重視する。アイヤーの主張は、そんな価値観に反する啓示だった。彼が語る「Nowhere（どこでもない場所）」は物理的な場ではなく、心の在り方そのものを指す。そこには縛られない自由や静けさがあり、それがストレスの軽減や自由な発想を生むという。

パスカルも「人間の不幸は、一つの部屋にじっとしてられないことからやって来る」と語っている。「どこにも行かない」とは、移動の否定ではなく、自分の心をしばらく動かさないこ

となのだ。

私の昭和は慌ただしかった。当時人気を博したバンドのバラクーダーが、一年中どこでも「酒が飲める 酒が飲める 酒が飲めるぞ」と歌っていた。そんな中、ドイツに留学して現地の生活を体験するうちに、近・現代（モダン）の合理主義的なライフスタイルとは違うスタイルを感じた。物質的な豊かさを重視する時代でも、手作りの温かさやフォルムの美しさを体現する木製玩具に魅了されていった。あえて言うなら、そこに穏やかな普遍性を見だし、昭和61年（1986年）にヨーロッパの木製玩具の企画輸入会社をつくっていた。ただこうした考えと矛盾するのだが、私の生活は多忙を極めていた。



そんな私が「心の静寂」というものを考え始めたのは、忘れられない昭和63年（1988年）のクリスマスだった。その年の9月19日、昭和天皇の病状が悪化したという報道があった。すると忙しい日本はすぐに静けさに包まれていた。そして街は穏やかにみえた。そのとき静寂の力を初めて実感した。

報道後の日本は「自粛」ムードに包まれ、行事やイベントは次々と中止されたり縮小されたりした。この年のクリスマスには、心の静寂が訪れたように思う。家路を急ぎ、家族と過ごす人々が増えた。意図せず穏やかな時間が訪れた。これが日常のあるべき豊かさであると教えてくれたように思う。

この記憶は、心の地下水脈のように私の中に流れ続け、アイヤーの「Going Nowhere」と深くつながっている。「Going Nowhere」とは世界に背を向けることではない。自分の心と向き合うための時間である。SNSやスマホから絶え間なく情報が押し寄せる現代においてこそ、大切なことは、ほんの少し立ち止まり、心の奥にある静けさに触れ、自分と向き合うことが大切である。

今年、うれしいことがあった。ある会で金子公宥先生（大阪体育大学名誉教授）とお話をする機会があったからである。学部も専門分野も違うため、これまでお話をさせていただく機会はなかったのだが、先生からお声をかけていただいた。先生は76歳のとき短歌を始められ、多くの入選歌を生み出している歌人でもある。私も以前短歌を詠んでいたことを話すと、再開を勧められた。それで最近、自分のこれまでの短歌を整理しつつ、新たに詠んでいる。

私は、短歌を詠むとき、心の動きを静める。外界からの刺激をいったん止めて、「今」を維持して言葉をさがす。これもまた自分との対話であり、「Going Nowhere（どこへも行かない）」だと思ふ。

はげるとよに 道標（みちしるべ）なき言葉たち 心惑わず ぼくへ帰れよ

あなたも立ち止まり、佇み、自分の心に耳を澄ませば、心の奥に眠る静寂が顔をのぞかせてくれるかもしれない。それはストレスを軽減し、嫌なことを別の視点で見られるようにしてくれるだろう。これこそ、Going Nowhere（どこへも行かない）の魔法だ。まさにGoing Nowhere（どこへも行かない）が「静けさを見つける」ことに変わる瞬間だ。

さあ、日常の中の静寂を見つけ、自分と対話する小さな冒険に出発しよう。静けさに耳を澄ます瞬間、心の奥に新たな静けさを発見できるだろう。そして、より自由な自分に近づける。冒険者になる第一歩は、ただどこへも行かないことである。





本物を学び、極める

大阪体育大学

【大学院】

- スポーツ科学研究科
博士（前期・後期）課程

【スポーツ科学部】（1年）

- スポーツ科学科

【体育学部】（2～4年）

- スポーツ教育学科
- 健康・スポーツマネジメント学科

【教育学部】

- 教育学科

大学事務局

庶務部、教学部、入試部、広報室
キャリア支援部、大学院事務室

大学附置施設等

図書館、スポーツ局、社会貢献センター
情報処理センター
スポーツ科学センター
国際交流センター、学習支援室

<https://www.ouhs.jp/>

OUHS ジャーナル 2024年(令和6年)12月23日(月)

発行所：大阪体育大学 広報室 発行責任者 大坪康巳 協力：教育後援会・学友会
大阪府泉南郡熊取町朝代台 1-1 電話(072)453-7021 FAX(072)453-8818